

春の萌しを探しに和歌山・龍門山・田代峠(638m)に

三寒四温と言う語は「春はもうそこ」の期待も含めて受け取ってきたが、今年のそれは、寒暖の差の大きさと共に記録的な降雪や予想外の荒天など、年寄りには厳しいものだった。こうした中、春の萌しを探して和歌山・龍門山地に向かった。

春を待つ里

3月14日9時59分 JR 和歌山線粉河(こかわ)駅着。トイレを済ませて出発。タクシーは紀ノ川を渡り、対岸の住宅地の中を昇っていく。10時15分登山口着。登山口と言っても住宅地の中だ。

そこから傾斜のきつい舗装路を徒歩で上っていく。左右には柿畑が続く。畑で働く人々は柿の木の剪定と畑地の清掃に余念がない、「富有柿ですか」と問うと「いや、此処はひらたねや」との答え。ここ、紀の川流域は「平核無し柿(ひらたねなしがき)」の名産地なのだ。

群れ生活からカップル生活に移るメジロたち

柿畑の西端には高い生け垣が施され、そこに榎の木が使われている。高野山に近い土地柄ゆえ、コウヤマキかと思って注意して見たがコウヤマキではなかった。防風生け垣に最適の樹種とされるイヌマキだ。

その生け垣の所々にビワも植えこまれてあり、白い地味な花をまだ残している。ビワの茂みの中で、メジロのささやき合うような地鳴きのおしゃべりが賑やか。

さらに登ったところでは「チューリー」「ツウ」と囀りあうつがいのメジロに出会った。メジロは冬の間続けてきた群れの生活を解いてカップルになり、巣作り、産卵の季節を迎えつつあるのだ。

ウグイス、ヒヨドリ、コジュケイも

10時50分、柿畑が尽きて山道に入った。ここに大きな湛水タンクがあり、道は大小の石、岩を踏みながら登っていくことになる。遠近(おちこち)でウグイスが鳴き、すぐそばでヒヨドリも甲高く啼く。コジュケイの声が遠くから響いてくる、「チョット来い、チョット来い」。

松茸山があるのだ

11時8分、再び林道に出、県立公園の看板地図で道を確認後、再び山道に入る。岩が露出し、石がゴロゴロした粘土交じりの路だが、迷うことはない。所々にロープならぬ紐が道沿いに張られている。登山者のためでないことは明らか、

疑問に思いつつ登っていると、やがて手書きの看板が建っていた。「松茸山なので立ち入り禁止」。紐は野獣除けならぬ人間除けだったのだ。

リョウブの芽吹きももうすぐ

雑木林の中で目立ったのがリョウブの多さだ。株立ちのものもあり、途中で枝分かれたものもあるが、それぞれが一群れの塊となって、まだらに剥げ落ちた光沢のある樹皮と相まって存在感が半端ない。

もうすぐ、やや褐色がかった新緑の若葉を茂らせることだろう。リョウブの若芽を山菜として食卓にのぼせる所があるらしいが、この地ではどうなのだろう。

散り敷かれたホウの葉の白さが目立つ

登山道に散り敷かれた朴(ほう)の葉の多さにも驚いた。岩や地面に張り付いた葉はとても大きく、白の木綿ハンカチを無造作に投げ散らしたかのよう。この樹もこの大きな葉を輪状に茂らせ、大輪の白い花を咲かせて、甘くて強い芳香を振りまくのも間もなくだろう。

田代峠は稜線上の小さな広場

稜線に近づいたところで、下ってくる登山者に会った。名古屋から車を駆ってきた68歳の男性。龍門山と飯盛山とを登ってきたと言う。一回り以上も若い男性の健脚をうらやみながら、好天に恵まれたことと互いの健闘を称えあって別れた。



↑下山途中での梅林と粉河の風景・和泉山脈



↑メジロ(二上山で)



13時丁度に田代峠到着。ちょっとした広場になっており、周囲の木々から頭を出す形で松の木が突っ立っている。時折吹く風は少し冷たいが、柔らかに降り注ぐ陽光が温かい。

十字路になっており、右に行けば龍門山、左の尾根道は飯盛山に通じている。

エナガもカップルで

ここで遅めの昼食を摂ることにし、露出した岩に腰掛け、妻手作りのおにぎりを頬張っていると二羽のエナガが近くの木々を飛び交いつつ餌をついばみ始めた。エナガの体長は13～14cm、そのうち尾の長さが半分以上だから、日本で最小の鳥の一種だ。

エナガも冬の間は集団生活をおくる。エナガだけの10数羽の群れに山麓の住宅地で会ったこともあるが、シジュウガ

↓**エナガ** ラやヤマガラなど「カラ類」と呼ばれる数種類の小鳥たちとの多数の群れ＝混群(時にはメジロやキツツキの仲間コゲラも加わることがある)でよく見かける。

科学的に実証されたシジュウガラの「言葉」

でも、群れ、しかも多種の小鳥たちの群れは、どうやって行動の一致をつくり出すのだろうか。少年時代からの疑問に、近年若い科学者が答えを出してくれた。

カラ類の代表格・シジュウガラは仲間同士のみならず一緒に群れをつくる他の鳥たちとも共通する言葉を操ることが若い学者の観

察・研究によって明らかにされたのだ。「タカが来た」とのシジュウガラの鳴き声で他種の小鳥たちも一斉に逃げ出すとのこと。

眼前で飛び回る二羽の小鳥たちの「会話」を聞いてみたいものだ。

満開の梅林の向こうに和泉(いずみ)山脈

13時30分下山開始。来た道を引き返すが、すぐにちりなし池分岐を通る。ちりなし池周辺は和歌山県特産のキシモツケの群生地らしいが、開花期は5月なので、立ち寄らないで下る。

帰路は遠回りだが林道を歩いた。このコースにはいくつもの梅林があり、満開のウメ林の向こうに展望が開けていた。見下ろした景色の真ん中を紀ノ川が流れ、その右岸河岸段丘に粉河(紀の川市)の市街地が在り、鉄路や道路が走っている。そして市街地と山の間には畑地、林、集落が段々畑状に広がっている。その後ろの山々は大阪府との境をなす和泉山脈だ。

民家の庭にミツマタの花

ウメの香りをかぎ、眼前の景色を楽しみながら下ると、一軒の民家の庭にミツマタが花を開いていた。満開の花は陽光を受けて白黄色に輝き、むせかえるばかりの香りをあたり一面に漂わせていた。

春の香りの中を小鳥たちの声に送られて、ゆっくりと下り、15時35分発王寺行き列車で帰宅。

続・続・二上山に咲く花々 51

ミツマタ(三桎)

ジンチョウゲ科ミツマタ属

中国原産。和紙の原料となる植物のうちガンピ(ジンチョウゲ科ガンピ属)とコウゾ(クワ科コウゾ属)は二上山中に自生していますが、ミツマタはふたがみやまふるさと公園に植栽されているのみ。

奈良県下では和紙の産地・吉野町では民家の庭や畑地によく植えられていますし、下北山村前鬼(ぜんき)集落は今では無人になっていますが、この集落の入り口に大きな群落がありました。鹿による食害が少ないとされ、全国各地で野生化しています。

ご覧の通り枝が3つに分かれるのでこの名になりました。花期は3月～4月。枝先に半球型に花を密に咲かせます。日本の紙幣の原料として有名ですが、ほとんどがネパール等からの輸入に頼っています。

話変わって、私の連れ合いの旧姓は三枝(さえぐさ)ですが、この姓の語源はミツマタとされています。



↑ 田代峠(たしろとうげ)



↓ ↑ シジュウガラ

